

# フレキシブル・ラーニングを取り入れた授業の設計、実践、評価

長谷川 元洋  
金城学院大学 現代文化学部

## 1. はじめに

平成14年の大学設置基準の改訂により、遠隔授業の定義が「同時かつ双方向」でなくともよいことになった。ビデオオンデマンドによる講義の受講が注目を集めているが、遠隔授業の定義を満たすための条件には「毎回の授業の実施に当たって併せ行うものであることに留意されたいこと。」、「学生の意見の交換の機会については、大学のホームページに掲示板を設け、学生がこれに書き込めるようにしたり、学生が自主的に集まり学習を行えるような学習施設を設けたりすることが考えられること。」という文章が添えられていることから、フレキシブルラーニングを日常の授業に取り込み、学生間で議論したり、協調学習を行ったりすることで学生に学びの機会を保障することをねらいとしていると筆者は解釈している。

それを念頭に置き、大学設置基準第25条に定義される遠隔授業の要件を満たす学習環境を整え、学生が授業外において、また、教室を離れて、フレキシブルに学習できる授業を展開した。本稿では紙面の関係で大幅に省略して、述べるが、当日、口頭と配布資料でこの実践における授業デザインとその意図の説明、授業デザインや学習環境の解説、授業実践後の評価等について報告する予定である。

また、本稿執筆段階で教育法の授業において、テレビ会議システムを使って、学生に小学生を対象に遠隔授業を行う実践中である。これについても当日ビデオ等で紹介し、その教育効果についても報告する。

## 2. 授業デザインとその設計意図

### (1) 授業構想の際のイメージ

授業を構想する際に頭に思い描いた授業のイメージの要件は次の通りである。

①ただ、話を聞くだけで終わらず、必ず、全員が参加できる授業、②自分の考えを見つめさせることができる授業、③教師対学生だけでなく、学生相互が学びあえる授業、④掲示板への発言だけでなく口頭発表の場面を入れた授業、⑤半期の授業の中で成長できる授業、⑥最新の情報を使いながら、新しいことを学んでいると実感できる授業、⑦表のカリキュラム（学生が学びたいと要望した内容）と裏のカリキュラム（私が教えたい内容）を重ねた授業、⑧授業内だけでなく、授業外でも、また、教室外でも学生相互が話し合ったり、協調したりして課題に取り組んだりできる授業（フレキシブル・ラーニング）

筆者が理想として思い描く授業の⑧は大学設置基準第二十五条の遠隔授業の定義に当てはまると考える。また、この理想を実現することで、大学の授業において、学生に「学びの場」を提供できると考えた。

### (2) 平成14年度の実践からの反省点とその対策

平成14年度に行った授業の反省から次のような点を今年度への課題として挙げた。

**課題 1** : 知識を与えてもらうのではなく、自分たちで生み出すという授業方法に違和感を持つ生徒にどうやって学習の意義を感じさせるか？

**課題 2** : グループ内で一部の学生に負担がかかるケースが見られた。グループ内の役割分担をどのようにできるだけ均等にさせるか？

**課題 3** : 生徒間の学習成果に大きな開きがあったため、底上げをどうするか？

**課題 4** : 生徒間のコンピュータ操作スキルの差にどう対応するか？

**課題 5** : 生徒の興味関心の違いにどう対応するか？

**課題 6** : 各学生の学習状況をどのように把握し、どう評価するか？

### (3) 課題に対しての対策

上記課題に対して、とった対策は発表当日述べる。

## 3. 実践を終えて

### (1) 授業者から見た学生の様子

毎時間、大福帳により、学生と双方向のコミュニケーションを図って授業を行ったが、学習記録カードに書かれた学生の感想には「頭をフル回転させて、とても疲れた。」「難しいが、考えることが楽しい」「他の人の意見を読んで考えさせられた」といった意見が書かれ、学生たちの知が教室内で共有され、共鳴している雰囲気を感じた。また、大福帳からもそれが読み取れた。

また、グループでの学習に移った後半でも、学生が授業外での取り組みをチームで行い、それぞれの班がうまく役割分担をし、ICTを使って、協調学習をうまく行っていた。

授業者の予想を超えた取り組みを学生は行い、授業後も教室に残って、相談したり、議論したりする姿や昼休み等に昼食を食べながら、ミーティングをする姿があった。

こういった姿から、学生主体の学びを保障した授業を行うことができたと考えている。

### (2) 今年度の課題についての対策の効果

約80%の学生が満足感を得て、この授業を終えた。不満を感じて終えた学生は4%だったことから、課題に対する対策や授業内でとった、手だてはかなりの効果があったと判断している。

## 4. 今後の課題

わずかではあるが、十分、課題に取り組めなかった学生、思考を伴わない単純作業のみ分担していた学生が見られた。こういった学生を無くすにはどうすればよいかを今後考えたい。

また、約74%の学生が課題への取り組みが大変であったと答えていた。中には「すべての科目がこのスタイルでやられたら、たまらない」とまでコメントを書きそえていた学生もいた。学習目標と学生への負担とのバランスをどう考えるかが課題である。また、負担を負担と思わないほど、学習意欲をたかめるような授業の工夫も必要だと考える。

今後もICTを活用し、より豊かで魅力的な授業を開発、実践していきたい。

(付記)

本研究の研究成果の一部はNIMEメディア教育開発センター平成15年度共同研究研究 記号CメディアFDとフレキシブル・ラーニング支援の研究開発 「③新しい学習環境を活用し、主体的に学習する能力を育成するために、フレキシブル・ラーニングの諸要因を分析し、学習者に視点を置いたモデル化と評価法について研究」によるものである。